

市民環境大学OB会 ニュースレター



第12号 2017年1月19日 発行 水量の懸念される浅川のシラサギ



挨拶をされる小倉先生

小倉先生受賞お祝いの会開催される！

市民環境大学OB会のアドバイザーである日野市環境情報センターのセンター長 小倉先生がこのほど長年にわたる陸水研究への功績で、日本陸水学会から日本陸水学会賞(田中賞)、とうきゅう環境財団から社会貢献学術賞をめでたく受賞されました。

12月15日の定例会において先生のご功労、また日頃の熱意あふれるご指導に対し感謝の気持ちを含めてお祝いの会が開かれました。

会では最初に飯島会長から先生の受賞の紹介があったのち、先生からご挨拶頂き、その後花束の贈呈がありました。

また、食事をしながらの懇親会では参加者全員(17名)から先生へのお祝いの言葉や近況報告などがあり、会は3時間にも及び大変盛況となりました。

琵琶湖に学ぶ市民による環境維持活動！

市民環境大学OB会では定例会の中で「川と湖を見る・知る・探る 陸水学入門」という本を教科書として勉強しています。今回は最近読んだ中から、「トピックス21 琵琶湖をめぐる「はしかけ」運動」というのを取り上げます。琵琶湖の汚染は1960年代からで、石鹼運動など県民挙げて水質改善活動が行われ、そこから琵琶湖に特化した博物館がつけられました。いまでは琵琶湖そのものの調査研究と琵琶湖と人の暮らしとのかかわりをつなぐ拠点となり、それを支えているのが市民を中心とした「はしかけ」と呼ばれる活動です。今回そのトピックス21及び琵琶湖博物館に直接取材された内容をOB会員の戸川さんに投稿して頂きました。

投稿 「地域だれでも・どこでも滋賀県立琵琶湖博物館はしかけ制度」 戸川二美子

「博物館活動を共につくっていこう」という目的に、ボランティアと博物館の学芸員が結びついているのがこの制度だ。2016年12月現在、活動グループは20、登録ボランティアは330人。活動では「楽しい」と「緩い」の2点を最も大切にしている。楽しくなければやる気は起こらないし、緩くなければ長続きしない。

活動は調査研究、ワークショップと多種あるが、いずれも博物館が提起するテーマの延長上にある。予算的措置がないので、「たんさいぼう」や「田んぼのいきもの」グループは自分達で「補助金」を貰ってくる。ボランティアも論文を書き、研究成果は学会で発表し専門誌に掲載される。「里山体験」「森人」などお金のかからないモノを持ち寄ってやっているグループも多い。博物館にある資源=人・モノ(学芸員、研究者、紙、顕微鏡、施設など)は何でも使える。

またフィールドでの調査方法を「基準化」することで、学芸員が付かなくても調査活動ができるようになっていく。活動の企画・運営はボランティアが自ら行うのが基本で、ボランティアの熱意が大きな部分を占める。現に学芸員が頑張っても潰れるグループもあり、ボランティアのアイデアで新しく起こる活動もある。

この制度でも高齢化が問題になっている。担い手の中核は60代以上で、80代で活躍する人も、土日だけの活動なのだが、若い人は入ってもすぐ出て行ってしまいう例が多い。今の若い人に余裕がないのはどこも同じなのだろう。博物館活動の原点は世界的にも希少な古代湖・琵琶湖と「より良い共存関係を築く」という理念にある。理念は環境意識の高い市民の多くに共有され、行政と市民とのパートナーシップも強い。「良い関係」とは？常に模索中という。

「かわせみ館」を拠点にする日野の市民環境ボランティア活動と共通点がありそうだし、学ぶべきヒントも多い。

【OB会コラム】 ニュースレターではOB会員の皆様にご意見を投稿いただく目的で「OB会コラム」を新設しました。今回は詩集なども出版されている大山さんに以下投稿いただきました。

投稿 「奇跡を生きる」 大山 末子

一番身近に幸せを感じられず、余裕の無い日々を送っているのが人間かもしれない。生きていることが「奇跡」であると、感じる事が出来ないほどに忙しい日々送っている。そう、時の番人に追われ陥ってしまう「当たり前」という文字。当たり前を並べるほどに、大切な物が軽んじられ「不幸」という文字に苛立つのかもかもしれない。

当たり前を見直すと「幸せ」という文字が浮かび上がってくる。奇跡的に、大地に生かされているということを感じると、日々が「ありがたい」と心に豊かさが生まれる。この大地という自然が、私達の日々潤いを与えてくれることに気づくはずだ。今からでも遅くはないと大地が叫ぶ、生きられる意味を見て、と活動する人達に導かれ私も歩く。市民環境大学OB会の中で、より深く感じられ感謝しながら参加させて頂いています。子孫たちに残せるものは、この大地だと思ふのです。